始まっています　地域内交流！

「地域の人びとの信頼関係を良好に保つ」ために！

「長瀬2区いきいきサロン」

長瀬2区いきいきサロンは、平成20年7月に組織され、主に65歳以上の人を対象に、年4回ほど活動している。「中国ワンタンの会」など、興味を引くネーミングをして、なるべく多くの人が参加するよう工夫している。

長瀬2区いきいきサロンでは、いきいきサロン本来の目的である地域に住む高齢者の引きこもり防止と実態把握を中心に活動している。宮原会長は、「いきいきサロンに来て、仲間と顔を合わせて、世間話やカラオケを歌って帰ってくれればそれで良いと思っています。出てきてくれれば、体調などがわかるし、声がけなどもしやすくなります」と語る。

当面の課題は、「一度来てくれた人は継続して参加してくれますが、問題は、1度も来たことがない人です。元気に畑仕事などをしている人もいる一方で、家に引きこもっている人もいるのではないかと思います。なるべく、近所の人に声がけしてもらい参加者を増やすことが大事だと思います」と話してくれた。

中国ワンタンの会の様子

また、宮原会長は、地域力（ソーシャル・キャピタル）の大切さを強調する。地域の人びとの信頼関係が良好に保たれていると近隣の治安の向上や子どもの教育成果の向上、地域住民の健康状態の向上などに好ましい効果をもたらすという概念だ。

「我々のような年代になると、社会との繋がりが希薄になるので、人とかかわる機会を持てることがとても励みになります。町で「こんにちは」と声をかけてもらうこと。そんな些細なことが自分の存在を確認する機会になっているのです。いきいきサロンの活動を通じて、地域の人と人とがふれあい、コミュニケーションできる場を増やすことで、地域の力をさらに強めていきたいと思っています」と意気込みを語る。

「現在は65歳以上の人が対象ですが、今後は、若い世代を含めた活動にしたいです。そして、地域に住む人びとが気軽に参加できる雰囲気づくりをして、無理をせず継続していきたいと思います」と話してくれた。

毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ 202

昔の「婚活」

―仲人の重要性―

戦前、毛呂山でも農業が主流だった当時、結婚式は農閑期である冬に行われることが多かったため、冬季は嫁入りの季節でした。

今回は昔の結婚について振り返ってみましょう。

最近では「婚活」という言葉が流行していますが、今も昔も結婚のための活動は盛んに行われました。もちろん、その様子はかなり変わってきています。

戦前の結婚はお見合いがほとんどでしたが、現在のお見合いとは異なり、男性側が女性の顔を見るのは女性の家を仲人と訪問し、女性がお茶を出しに来たわずかな間で、お互いに相手の顔はほとんど見ることもなく親同士の話がまとまれば決まってしまいました。変わった例では、お見合いの時は姉が出てきたのですが、結婚するときにはその妹が出てきて、男性もどうも以前と違う気がするとは思っていたものの、そのまま生活し、数十年が過ぎたという人もいます。それだけ当時の結婚は当人同士よりも家同士の関係が重視されていました。

そのため仲人は事前に両家の仲をよく取り持ち、時には男性本人も行商などのふりをして相手を見に行くこともありましたが、やはりお互いの家を結びつけるため仲人の存在は欠かせないものでした。

戦前、恋愛結婚は「ナレアイ」といってあまりよく思われていなかったため、「婚活」といえば仲人によい相手を見つけてくれるよう頼んでおくぐらいでした。仲人は色いろな家に出入する行商人や親戚の世話好きで話上手な人がよく縁談をまとめていたといいます。相手の欠点は言わず、長所を大げさなぐらいにいうのが仲人の務めでした。このような仲人の存在があってこそ村落内の高い婚姻率が保たれていたのでしょう。

昔の「婚活」は、家族や親戚、仲人など周囲が話を固めていくものであり、現在のように本人が「婚活」をするということはあまり多くなかったようです。そういう意味では、現代人はむしろ苦労しているといえそうです。

大正時代の嫁入り
（写真提供　新井美千代さん）